東　欧　―ポーランド語・チェコ語

一　ポーランド語とチェコ語

ロシヤ・東欧語学科発足まで、およびその背景

隣国ロシアの言語を学ぶ重要性については誰の目にも明らかで、ロシア語は建学当初の五つの言語の一つとなった。ところが、ロシア語以外のスラヴ語となると、学習者、研究者の数はたちまち減り、ごく一部の例外を除けば、これらの地域の文学はすべて、戦前は言わずもがな、戦後もしばらくは英語やロシア語、あるいはドイツ語やフランス語などからの重訳であった。しかしヨーロッパには、列強とか大国と呼ばれる国以外にも、長い歴史と伝統を誇り、水準の高い学問や文化をもった国がたくさんある。その好例がポーランドとチェコであり、これら二つの、ロシアとは異なるスラヴ世界の言語と文化を学ぶ必要性は、専門家の間ではかねがね指摘されてきた。その意味で本学がこれら二つの言語を、ポーランド語については大学院外国語学研究科スラヴ系言語専攻課程の「各個言語」ないし「スラヴ諸語比較研究」という授業科目の中で、チェコ語もまた大学院や学部の授業科目「言語学特殊研究」の中で、あるいは公開講座において、長年にわたって教授してきたことは特筆に値する（さらに遡れば、昭和の初期に、ステファン・ウビェンスキなる人物が東京外国語学校でポーランド語を教え、二十数名の聴講者がいた、という指摘もある）。

本学に第二、第三のスラヴ語を専攻語として設けたいという関係教官の念願は、米ソ関係の脱冷戦化に促された一九八九年以降のいわゆる東欧の変革を背景に、ようやく現実味を帯びることになる。すでにソウル五輪を目前に控えた韓国では、いまだ国交関係のない東欧諸国との経済・文化交流の拡大を期待して、八七年に韓国外国語大学がポーランド科とルーマニア科を新設、翌八八年にはチェコスロヴァキア、ハンガリー、ユーゴスラヴィア科を増設していた。こうした国際状況の変化と改革の機運に乗じて、本学が新たに二つのスラヴ語の専攻語コースを開設することができたのも、実は学内にこれらの言語の研究と教育の確かな実績があったからにほかならない。

当初、ロシヤ語学科とは別にスラヴ語学科を作る案が概算要求に提出されたが、文部省当局との折衝を重ねる中で、既存のロシヤ語学科をロシヤ・東欧語学科に改組し、その中に新たにポーランド語とチェコ語の専攻語コースが設けられることになった。従来のたこつぼ型の学科編成に逆らって、ロシヤからロシヤ・東欧へという広域化を伴ったこの改組は、その後の学部再編という大きな動きの中で眺めるなら、文字通り変革の先駆けであったと言える。現在のロシア・東欧課程の基礎はこのときすでに成立していたわけである。

ポーランド語・チェコ語専攻コースの開設と学内外の反響

一九九一年四月、大所帯となったロシヤ・東欧語学科が発足し、七六人のロシヤ語専攻（定員七五名）の学生とともにポーランド語専攻一三名、チェコ語専攻一六名（定員はそれぞれ一五名）の第一期生が入学する。彼らを迎えた教員スタッフは、専任教官が本学の言語学担当から移籍した千野栄一教授（スラヴ語学、チェコ語学・文学）と信州大学教養部から転任した石井哲士朗助教授（ロシア・ポーランド語学）の二名、ほかに非常勤講師四名（内ポーランド人とチェコ人各一名）であった（石井助教授は同年九月末までは併任扱い）。翌五月に行われた恒例の全学ボート

大会では、初出場のポーランドチームが男子覇業レースで優勝をさらった。

同年七月三日、本学四号館六階の大会議室において、ロシヤ・東欧語学科発足記念祝賀会が催された。席上、参列者を前に、ソ連、ポーランド、チェコスロヴァキアの各大使館の代表が祝辞を述べたが、その中でポーランドのパヴラク臨時代理大使が新学科の名称に言及し、「いまや東欧なるものは存在しないのだから、できれば中欧あるいはスラヴという名称にして欲しかった」という趣旨の発言をしたのが印象的であった。とはいえ、自国の言語を専攻語とする学科の誕生は、ポーランド、チェコ両国民にとっても大いなる喜びであったことは間違いない。

翌九二年一月、着任まもないリプシツ新ポーランド大使が来学して、原卓也学長にあらためてお祝いを述べ、一期生の歓迎を受けた。大使はこの時の感激を、学長宛の礼状の中で、「教室で若い学生たちがいかなる理由の故か、舌のからまるような私の母国語の習得に果敢に挑戦されている様を拝見しておりますと、彼らの学問に対する瑞々しい純粋さに触れ深い感動を覚えると同時に、うらやましさも覚えました」と書いている。大使はまた九五年四月、在京ポーランド大使館で原学長と千野教授に、日本初のポーランド語専攻コース開設の功績を称えるヴァウェンサ（ワレサ）大統領署名の功労勲章を授与した。

なお、ポーランド、チェコ両国との交流について付言すれば、ポズナンのアダム・ミツキェーヴィチ大学学長イェジ・フェドロフスキ教授が九四年八月に来学、石井助教授は九六年十月より一年間、ワルシャワ大学日本学科の客員講師を務めた。また九八年三月にはプラハのカレル大学学長カレル・マリー教授が来学し、翌年二月、本学の中嶋嶺雄学長がかの地を訪れ、カレル大学との大学間交流協定に調印した。